

## ★ HPVとは？

ヒト・パピローマウイルスは、ヒト乳頭腫ウイルスとも呼ばれています。HPVには全部で100以上の型があり、皮膚に感染し疣(イボ)をつくるタイプと性器などの粘膜に感染するタイプがあります。粘膜に感染するHPVのうち、高リスク型と呼ばれるHPV16型、18型、33型、52型、58型などの十種類が「子宮頸がん」の原因ウイルスです。

一方、6型、11型に代表される低リスク型と呼ばれているHPVは尖圭コンジローマと呼ばれる疣の原因ウイルスですが、子宮頸がんは起こしません。

HPV VLPの模式図



Reprinted from J Virol. 1994;68:4503-4505

## ★ HPVは誰でも感染しますか？

HPVは性交渉で感染します。性交渉経験のある人であれば誰でも感染する可能性があります。HPVはありふれたウイルスで、感染自体は全く異常ではありません。性交経験者の50～80%は少なくとも一度はHPVに感染したことがあると考えられています。また、男性の感染の詳しい自然史はまだ分かっていません。

## ★ HPVの陽性率は？

年齢によってHPVの陽性率は異なります。海外のデータによると20歳代では20%前後ですが、30歳代以上では5～8%と報告されています。国内のHPV陽性率は海外よりも少し高いようです。若年者は新規感染の機会が多いために陽性率が高く、その多くが一過性の感染でやがてウイルスは消失し、年齢の増加とともに陽性率は低下します。

## ★ HPVに感染すると必ず子宮頸がんになるのですか？

HPVに感染しただけでは、子宮頸がんになる危険性はほとんどありません。

たいていは、免疫力によってウイルスが体内から排除されますので、子宮頸がんになることはありません。しかし、ウイルスを排除することが出来ずに感染が長期に持続した場合には、平均で10年以上の期間を経て、子宮頸がんに行進する可能性があります。

## ★ HPVが原因でない子宮頸がんもあるのですか？

子宮頸がんの99.7%からHPVが検出されますが、例外がないとは言えません。また子宮頸部腺がんではHPVが検出されない例も報告されています。この場合、HPVの関与があるのかどうかはわかりません。また、低リスク型HPVは癌に行進するリスクはないと考えられています。

## ★ 子宮頸がんはどのくらい増えているのですか？

子宮頸がんの罹患率はここ10年で横ばい状態でしたが、ここ数年でやや増加の兆しがあります。発症年齢のピークは、30年前の50～60歳代から30～40歳代と若年齢化傾向にあり、前癌病変(中～高度異形成)は20～30歳代で著しく増加しています。

## ★ HPVは通常、どのくらいの期間で消失するのですか？

通常、HPV 感染の約 70%は 1 年以内に、90%以上は 2 年以内に自然に消失します。HPV 検査で陽性であった場合、間隔を空けて再度検査を受けることにより持続感染かどうか判断できます。また、持続感染していても HPV が自然消失することは少なくありません。

## ★ HPV感染の治療は出来るのでしょうか？

HPV 感染はほとんどが免疫により自然消失するため治療は行いません。また、HPV に対して有効な薬剤はありません。HPV 陽性の場合にはフォローアップを行います。もし、HPV の持続感染によって子宮頸部に異形成を生じ、それが治療を必要とする程度まで進行した場合は、病変の程度に応じて治療を行います。

## ★ HPV 検査はどのような検査法ですか？

子宮頸部を擦過して細胞を採取し、HPV 遺伝子を検出する方法です。  
欧米ではすでに子宮頸がんの検診の標準検査法として広く普及しています。



## ★ 細胞診と HPV 検査はどこが違うのでしょうか？

細胞診はがんまたは異形成を疑う異常な細胞がないかどうかを調べる検査ですが、HPV 検査は子宮頸がんの原因ウイルスに感染していないかどうかを調べる検査です。



## ★ 子宮頸がん検診で HPV 検査を併せて行う意義はなんですか？

細胞診はがんの発見率が高いのですが、前癌病変は見逃すことがあります。欧米での臨床データによると、約 3 割の病変を見逃すと考えられています。細胞診と HPV 検査を併用すれば、ほぼ 100%、前癌病変を含む高度病変を発見することができるようになります。また HPV 検査では、将来、がんになる危険性があるかどうかもわかりますので、30 歳以上または性交渉のパートナーが固定化し、新規の HPV 感染のリスクが低い女性であれば、両方の検査をおすすめします。当院でも行っていますので、希望があれば申し出て下さい。

## ★ 子宮頸がんは予防できるのでしょうか？

子宮頸がんは前癌病変の段階で発見・治療が可能です。定期的に検診を受けていれば子宮頸がんになってから発見されることは少なくなりますし、もしがんが見つかって初期の段階であることがほとんどです。HPV 検査では異形成やがんになる将来のリスクもわかりますので、リスクに応じた受診間隔で検診を受けることにより、がんになる前（異形成）の段階で発見・治療することが可能です。つまり、子宮頸がんは検診で予防可能ながんということです。

## ★ HPVワクチンとは？

製薬企業のグラクソ・スミスクライン社が、国内初の子宮頸がんワクチンを 2009 年 12 月 22 日から発売しています。このワクチンは HPV の感染を防ぎ、子宮頸がんの発症を 7 割減らせると期待されています。接種対象は 10 歳以上の女性です。3 回の接種が必要で、費用は自己負担ということです。同社の希望価格は 1 回分で 1 万 2 0 0 0 円だそうです。ワクチンにはウイルスを消失させる効果は残念ながらありませんので、既に感染がわかっている方は適応にはなりません。



《参考文献・参考サイト》

・(株)東京公衆衛生研究所 提供文献 ・読売新聞掲載記事より(2009,12,10)

使用素材 \* ROKO \* <http://roko.lolipop.jp/>

担当:検査部 飯塚・横田